

おじいちゃんと思い出

ラジオネーム：アズキまめ

おじいちゃん。小さい頃の僅かな思い出しかないおじいちゃん。夏の夕方近く、小さな子供の足ではやや遠く感じられた綺麗な浜辺へ、毎日散歩に連れて行ってくれたおじいちゃん。浜辺では、貝殻を拾ったり、なでしこの花を摘んだりしたことを覚えてるよ。

何故か必ず近所の子供達も2、3人一緒だった。

忘れられないのは、昔の事で、床屋で使うような髭剃りで髭を剃っている後ろから、私が「わっー」と脅かしたら、顎をきってしまったよね。あの時ばかりは怒られた。

私が小学校3年生のときにおじいちゃんは亡くなった。

幼少期の思い出の中にだけあるおじいちゃんは、普通の大人のイメージだったが、大きくなってしまい込んでいた背広やコートを見たときに、おじいちゃんがとても背丈の低い人だと知って驚いたものだ。そのズボンの足の短さに、高齢になっていたおばあちゃんと改めて笑い話にしたものだよ。

元々は癩癩持ちだったから、天国では怒っていたんだろうね。記憶にあるおじいちゃんは、戦前だか戦後の一時期の流行り、

着物姿にカンカン帽をかぶっていたり、何の用事か堅調に出かけて行った時、珍しく三つ揃いの背広姿でとても立派に見えたりしたものだよ。中学高校の時、そんな一コマをふと思いで出して、なんだか童話に出てくるようなおじいちゃんだったなとおもって、一人で笑ったりしたこともあったんだよ。おじいちゃん。もうおばあちゃんも傍に行ってるだろう。

お父さんお母さんも一緒だよ。

みんなが亡くなって時が過ぎると、いろいろな出来事が小説の中の出来事みたいにもおもえてしまうよね。

自分自身が高齢者になり、幼少の頃からの事を思い出すと、古い映画を早回しで見ているような感じで実に不思議なんだよね。近所にいた人達、親戚の人達、みんな同じような場所でまた会えたりしているんだろうかね。

もしそうだったら、そっちに行った時何を言われるのか、おかしいような、勘弁して欲しい様な妙な気分だよ。

リクエスト曲

へ 大きな古時計／平井堅 へ